

ベンジャミン・プロツキー「ビューティフル・ジャパン」白老部分抜粋

ご覧いただくのはベンジャミン・プロツキーというユダヤ系米国人が遺した「ビューティフル・ジャパン」という未完成に終わった上映時間 2 時間以上の外客誘致のための日本紹介作品の「白老部分」抜粋である。撮影されたのは 1917-18 年の間だが、細かくは確定できていない。米国国立スミソニアン協会人間科学フィルムアーカイブ(HSFA) 所蔵。

抜粋の内容

冒頭、白老駅からアイヌ集落方向に向かう乗合馬車に「白老の特急オーバーランド号」と米国の観客向けを狙ったおちょくり字幕が出るが、これは当時シカゴとサンフランシスコを最短時間で結んでいた米大陸横断特急列車のこと。米国からの旅行者男女が乗り込むが、彼らは別の劇映画企画のため日本に招かれた俳優たちである。不愉快な字幕が続く事にはご勘弁いただきたい。つづいて村落全景を見せた後、仔熊を檻から出すところからクマ祭りを紹介が始まる。立派なひげを蓄えたエカシ(長老)等、既婚女性の口元の刺青、仔熊が広場に引かれる様子、カムイノミのトノトを日本のウィスキーである酒と紹介している、踊りを求婚の踊りの様に解説と、最後まで乱暴な説明をつけている。

検討すべき課題

元町公園の最上部に、現在市民用の水泳プールがあるが、そこがプロツキーの関わった東洋フィルム会社 TFK=大正活映撮影所の跡地である。指摘しておきたいのは、この跡地と N.G.マンローが横浜時代に一時勤務していたゼネラル・ホスピタルが、至近の関係で、彼らに直接・間接の接点があった可能性である。TFK 以前から映画機材商としてプロツキーが横浜で活動した期間は長く、可能性のある期間は 10 数年に及ぶ。マンローは、1916 年 4 月に白老のクマ送りについて、当時は横浜在住外国人が活動の中心だった日本アジア協会で講演し、その講演録の全文が同じく横浜で刊行されていた英字紙ジャパン・アドヴァタイザー4月 30 日号に掲載されている。TFK の親会社東洋汽船の本拠地も横浜であった。しかし、プロツキーの白老訪問が如何なる形で実現したかは不明である。北海道に渡る直前の青森港での写真を見るとかなりの大部隊で北海道に渡ったようだ。北海道の新聞記事報道などの調査はできていないが、新聞記事になっていれば、八田三郎らが記事を目にしていたらろうし、八田の撮影を支援した地元白老の村長や郵便局長は、数年前のプロツキー一行の撮影を目撃していた可能性が高い。

プロツキーについて

プロツキーはウクライナ生まれのユダヤ移民で、米国ではサーカス団員や映画館主となるが、20 世紀初頭、日本や中国で米国からの映画機材商として活動した。中国では「中国の旅」、日本では「ビューティフル・ジャパン」という各 2 時間を超す映画フィルムを遺した。彼自身の語った半生記も残るが、誇大妄想的ほら話に近く、謎と矛盾に満ちた人物である。彼は 1917-18 年、浅野財閥系のサンフランシスコ=横浜航路などを運航していた東洋汽船(TKK)による子会社東洋フィルム会社(TFK)の設立に参画して、外客誘致を目的とする日本紹介映画「ビューティフル・ジャパン」を帝国鉄道院や日本交通公社(JTB)

の協力で日本全国を周回し撮影を続けた。鉄道院の支援は手厚いもので、専用の寝台車・食堂車・乗用車を積む無蓋貨車など数両編成の撮影列車を提供された。TFK は横浜に本拠地を置く浅野財閥系日本企業なのだが、米国から招いたスタッフの参加を良い事に、米国からの撮影隊への便宜供与に偽装された。残存映像から辿ると、外客誘致目的以外に、プロツキーの個人的興味や、浅野財閥系企業の宣伝意図など、さまざまな思惑が混在している。

この時代、既に多数の映画雑誌が存在し、公開作品ならば、興業側が書かせた、お太鼓記事を含む作品評が載る筈だが、幾ら探しても見つからない。それでも後世、公開作品として扱う人々がいるのは、TFK 直営館、千代田館が、トーマス栗原改編の「美しき日本」上映告知を出しているからだが、内容の記述、鑑賞批評などの雑誌記事が一切見つかっておらず、告知のみに終わった可能性がある。栗原版「美しき日本」は作品が断片すら見つかっておらず、残存フィルムとの関係性は定かでない。残存フィルムには英文字幕が施されているが、明らかな欠落もあり、完成作品とは言い難い。残存フィルムは、国立スミソニアン協会人間科学フィルムアーカイブ(HSFA) 所蔵だが、元々当時の駐日米国大使ローランド・モリスの遺族が所蔵していたものを 1970 年代前半に NHK 米国駐在員が NHK の放送利用権取得をめざしフィルムの不燃化複製と設立まもないスミソニアン協会 HSFA への寄贈の世話をした。残存フィルムが何故に駐日米国大使の元にあったかは判然としない。プロツキーの遺族が、「中国の旅」は所蔵しているので、何か別の事情があったと想像される。NHK は取得した映像を「青い目の見た大正期の日本」と題してアーカイブ化し、出典を明らかにせず、しばしば大正期、時には明治期！を描く番組にも資料映像として使用している。プロツキーと働いた中国人たちが、最初の中国映画人となったため、台湾・香港・中国の映画史では肯定的に評価されているが、米国での作品実績が無いと、米国の映画史で米国の映画人としては扱われていない。当時の米国の映画雑誌では、彼の「中国の旅」は、かなり掲載されているが、「ビューティフル・ジャパン」の作品評は見つかっていない。英文字幕版は、明らかに米国向けの売り込みを目指すものではあったが、幅広い公開は成功しなかったのであろう。

TFK は後に改組され、浅野総一郎の二男、良三らにより短命ではあったが、意欲的に劇映画国内制作・外国映画輸入配給・系列映画館経営を行う大正活映になった。その記念碑が横浜元町公園の一隅に横浜市の手で建立されている。驚いたことに関係者として除幕式に招かれた浅野良三の遺族らは、祖父が映画会社に関わっていたことをそれまで全く知らなかった。いかなる不都合な事態が発覚したのか、1 年余りでプロツキーは TFK から追放されている。浅野総一郎の生涯は克明な記録が遺されているが、そこからは TFK や、プロツキーばかりか、浅野一族の大正活映自体への関与まで抹殺され、息のかかった関係者は、以後、口をつぐんで語らなかった。しかし、大正活映の文芸部長は、後の文豪、谷崎潤一郎であり、ハリウッド帰りのトーマス栗原ら映画監督、俳優が関わっていて映画人たちの口まで全て塞ぐ訳には行かなかった。プロツキーの遺族の元には横浜時代のプロツキーの写真アルバムがあり、そこには、浅野総一郎の後継者、泰治郎(二代目総一郎)が、撮影列車の車窓で TFK の腕章をつけている姿も記録されている。

岡田一男は、1990 年代初め北海道立北方民族博物館創立期の映像収集活動の中で、米国スミソニアン協会所蔵の映像調査中にこの映像に出会った。取得映像に興味を持ち、岡田正子が、詳しい調査を続けた。